

## 〈越境〉から〈跨境〉へ

—東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校日本研究センター編  
『跨境／日本語文学研究』



小泉 京美

〈越境〉という概念が文学研究の文脈で使われるようになったのはいつ頃からだろうか。学際的な研究が目指され、研究対象としても文化や芸術の領域横断的な事象が取り上げられるようになった。あるいは、ポスト・コロニアルな文化状況の出現とグローバリゼーションの進展の中で、国や地域の境界の移動や、階級や人種、性や世代間の交差が、刺激的なテーマとして話題に上るようになった。研究対象だけではなく、研究活動においても、複数の学問領域との協働や複数の国や地域に跨る共同研究など越境的な展開が見られた。

『跨境』の刊行母体である「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」も、このような動向の延長線上にあるといえるだろう。2013年に韓国・中国・台湾・日本の研究者によって設立されたこのフォーラムは、同年10月18日から2日間にわたって高麗大学で第1回大会「東アジアにおける日本語雑誌と植民地時代の文学」を開催した。大会について、黄東淵「国民国家という境界を越えた文学(者)と歴史(家)の交流—「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」第一回大会への参加記」(『跨境』創刊号、2014年6月)は、「多くの発表が東部アジア4カ国において、いわゆる「民族文学」が「日本語文学」と直接的、あるいは間接的に相関関係を持つことを示唆しており、これは超国家的連携(transnational linkages)が各国民国家の文学の中に存在することを表している」と所感を記す。さらに、「学際間の境界を越えて文学と歴史を研究する学者たち自ら」が、「国民国家という境界を指摘するのみに留まらず、物理的にも直接乗り越えながら研究することにより、その結果を共有することができる」と述べた。このような場の実現は、学際的研究や国際共同研究の推進の過程でたびたび試みられてきた。

例えば、満洲(中国東北部)における日本語文学の研究では、1980年代末から90年代に日中共同研究が本格化し、国際シンポジウムやその所産としての書物を通じて

成果が公表されてきた。雑誌という形態では、日本社会文学会の国際シンポジウムの成果を引き継いだ植民地文化研究会(植民地文化学会)が2001年に発足し、翌年、機関誌『植民地文化研究』を創刊している。

こうした一連の経緯は、ふたつの傾向として今日の研究状況に接しているのではないだろうか。ひとつは、異言語・異文化間の越境を肯定的にとらえ、多言語・多文化的な世界文学の状況を、各国文学の領域を越えた視座から読み解くというもの。もうひとつは、一国主義的な文学研究に反省的なまなざしを注ぎながらも、帝国主義侵略を倫理的に裁断するといった単純な結論に陥らないために、多様な歴史的な文脈や地域性に留意しつつ、個別の作家・作品の読解や評価を行うというもの。前者は越境や翻訳がもたらす文学の可能性を追求し、後者は相対的に慎重な場合が多い。あるいは、前者は文学環境のグローバルな展開により柔軟な対応を見せ、後者は比較的懐疑的に見える。もっとも、これらの傾向は、同様の状況が生み出したものであり、多くの場合は複雑に絡み合いながら進展するため、この二分法はあくまでも便宜的なものに過ぎない。そして、当然のことながら、複眼的に事態を把握するためには、どちらか一方ではなく両方がふまえられなければならない。筆者の研究テーマである1920年代から30年代にかけての大連の日本語文学に見られる以下の状況は、こうした文化的な越境、あるいはその研究の二面性を映し出す鏡のように思える。

帝政ロシアが清から租借し、日露戦争後に日本に租借権が移譲された大連は、中国・ロシア・日本の文化が混ざり合いながら、多文化的な植民都市として近代化が進んだ。その混濁的な文化状況を反映して大連で発行された日本語の詩誌『亞』は、「内地」の前衛詩運動が最盛期を迎えた1924年に創刊される。『亞』で展開された短詩運動は、同人にとって大連という都市が、日本文学の伝統性と距離を保ち、前衛的な詩的言語の実験を可能にする場であった

ことを示している。しかし、満洲事変から日中開戦を迎え、大連在住の日本人二世が表現の場に登場する1930年代になると、大連を日本人の「故郷」に変えるための安定した日本語・日文学の表現の秩序が求められるようになった。『亞』の言語実験を支えた大連という都市の前衛性は、一方では在住日本人の「故郷喪失」という不安を浮かび上がらせる条件となり、他方では満洲国建国をめぐる国家主義的な欲望を煽るものとしても機能するようになった。十五年戦争下の大連において、伝統の重みから離れようとする志向が、新しい理想の「故郷」を建設する力に転じたように、越境によってもたらされる状況は常に二面性をともなっている。

情報ネットワークの革新などによって、国境をはじめ様々な境界線に対する意識が希薄になっている今日の状況は、地政学的・歴史的な諸条件を度外視して越境の自由を強調する観念的な議論を加速させる反面、文化的な差異や断絶を強調する排外主義的な思考の出現をも後押ししているように思える。そうであるならば、いま必要なことは、安定していると思いがちな自己同一性の拠って立つ足元に、見えない境界線が無数に走っていることを意識し、その境界を可視化しようと努めることではないだろうか。〈跨境〉という言葉の「ニュアンス」が重要な意味をもつのは、このような姿勢をとるときだろう。同誌は冒頭の「創刊の言葉」で次のように宣言する。

〈跨・境〉——境界をまたぐ。跨ぐとは、たんに越すということではない。分割線を越えながらも、その両方に足場をもっているというニュアンスをもつ。越えて行くのではなく、跨いでつなぐこと。それぞれの局地性や立場を無視することなく、そこに一つの足場を置きつつも、さまざまな〈境〉の向こうに他方の足を伸ばすこと。

〈跨境〉という言葉は、西成彦「移動文学／比較文学者にとって「移動」とは何か」が指摘するように、「またぐ」という身体的な行動を想起させる。それは、あたかも境界線を無効にすることができるかのような〈越境〉という言葉の軽やかさとは異なり、個別の身体が個々の具体的な条件を思考の「足場」にすることを含意している。「分断を一気に解消する方策など、ありはしない。すべての多様な人々を包括するような場も、できようはずがない」という現状認識は、足元に注がれたまなざしと自身を拘束する重力の自覚の上にか成り立たない。

このような姿勢は最近改めて意識されているように思う。

例えば、1920～60年代の「占領」と「開拓」をめぐる問題に焦点を当てる占領開拓期文化研究会の機関誌『フェンスレス』（2013年創刊）の「創刊にあたって」には、次のようにある。「私たちの周囲には有形無形の壁・フェンス・バリエードが何重にも張り巡らされ、私たちはいつもそれに足をすくわれたり、知らずに侵犯したりする。（中略）そうした境界を往復し、時にはその線上に危うくとどまって思考することの試みが『フェンスレス』である」。問題提起に「満蒙開拓前夜から、内地の開拓運動が最盛期を過ぎ「列島改造」というあらたな「開拓」（開発）が始まる直前までの半世紀を大きく見渡す地平を「占領開拓期」と呼んでみる」とあるように、『フェンスレス』は時間的な分断の再定義に意識的だが、これに対して『跨境』は地域的な分断を繋ぎ合わせることを課題としている。それは、韓国・中国・台湾・日本の研究者が寄稿し、これに加えて編集や査読には米・独・仏の研究者が参加していることにも表れているだろう。日本語文学の書き手の国籍や民族、発表された地域などの横断性や重層性を対象化するだけではなく、研究主体もそうした横断性や重層性の中から研究の言葉を発することが『跨境』の試みの中心にあるように思われる。それは、研究者が自らの足場や自らを拘束する文脈を見つめ直す作業と結びついているはずだ。

「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」は2013年の第1回大会に続いて、2014年10月24日～26日にわたって、北京師範大学外国語学院で2度目の国際シンポジウム「大衆化社会と日本語文学」を開催した。『跨境』創刊号の特集は、第1回大会のテーマと同じ「東アジアにおける日本語雑誌の流通と植民地文学」である。目次を見て最初に目を引かれたのは、特集論文10本のうち、6本が満洲で発行されていた日本語雑誌を対象化した論文だったことである。他の特集論文や巻頭のエッセイ、一般論文や研究資料も充実しているが、自身の研究領域でもある満洲の日本語文学が、先行研究の蓄積の上に新しい段階を積み重ねていることに興味を抱いたのである。

劉春英「中国東北部における日抛時期の日本語雑誌の言説空間—文学創作を中心として」は、未発見の稀覯誌も含めた膨大なタイトルの分析を通じて、その植民地主義的特質を指摘する。単援朝「雑誌『芸文』の成立と変遷について—「文化綜合雑誌」から「純芸文綜合雑誌」へ」は新京で創刊された『芸文』について、発足の経緯から経営方針の変遷、文化戦略の展開などを詳細に分析した。王志松「翻訳と「満洲文学」—雑誌『満洲浪漫』における大内隆雄

の立場」は、「満系文学」と「日系文学」に系統化されていた満洲国の文学状況に一石を投じたと言われてきた大内隆雄の訳業の検討を通じて、「満洲文学」という概念の形成に関する大内の独自性を示した。林濤『『満洲浪漫』における「白日の書」への一考察』は、雑誌研究の観点から取り上げられることが多かった『満洲浪漫』の掲載作品の読解に踏み込み、横田文子「白日の書」に作家論・作品論からのアプローチを試みた。魏晨「『満洲』童話作家・石森延男の登場—満鉄社員会機関誌『協和』における創作活動を手がかりにして」は、石森延男研究の主流であった作家論や作品論の不足点としてメディアとの関わりに注目するもので、とくに『協和』を舞台とする初期活動を焦点化し、従来の研究に新しい視点を付け加えている。祝然「戦争末期の『北窓』—『掌篇献納小説』を中心に」は、満鉄哈爾濱図書館の館報『北窓』の『掌篇献納小説』に着目した論考で、「大東亜戦争」下における満洲の文化状況の機微を明らかにした。

各論で取り上げられている日本語雑誌に注目すると、1980年代末から2000年代にかけて、徐々に復刻版が刊行されていた資料が分析・考察の対象として取り上げられる傾向にある。とりわけ、詳細な解説が収録された呂元明・鈴木貞美・劉建輝監修『満洲浪漫』（ゆまに書房、2002～2003年）や、同『芸文』（ゆまに書房、2007～2010年）は、それまで不十分な資料によって分析や評価を進めてきた当該研究領域の研究水準を押し上げる画期的な成果だった。また、『協和』（竜溪書舎、1983～1987年）や、『北窓』（緑蔭書房、1993）などの満鉄関連資料は、カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアル批評の隆盛を背景に、学際的な植民地文化研究の進展の中で改めて注目されてきた資料群といえるだろう。資料の復刻刊行が示すように、これまで国内外の機関に収蔵されている関連資料の発掘調査とアーカイブ化を中心に、研究の基層となる資料面の書誌的な研究が進められてきた。しかし、資料面の基盤整備が進む一方で、公開された膨大な資料群の分析や評価はまだ始まったばかりである。こうした研究状況の中で、ほぼすべての論考が個別の作家や作品、具体的な文学状況についての分析や評価を主眼としていたことに新しい展開を感じた。

しかし、研究史を踏まえた進展が見られる一方で、『跨境』の理念とは裏腹に、研究のあり方が制度化された枠組みの中に自閉してはいないかということに気かけずにはいられない。満洲の日本語文学について、個別の作家や作品の評価や読解を行うことや、書物の出版や流通をめぐる状況

を解明し文化史的な記述をすることは、言うまでもなく必要な作業であるとみなされるようになった。だが、果たして、それらの作業は、隣接する多様な研究領域とどのようなかたちで関係を結ぶことができるのだろうか。

当然のことながら、ある文学事象の価値は、それを問う者との関係性の中でしか規定できない。そして、当該研究の意義も、研究主体と対象との時間的・空間的な距離が問われなければ、明確には見えてこないだろう。例えば満洲の文学現象について記述することは、対象のみならず、自らが拘束されている歴史的・地政学的条件を可視化することを意味する。しかし、満洲国のように、すでに存在しない<sup>トボス</sup>場所や現在とは隔絶した時間と、〈いま・ここ〉との関係を、どのように問い直せばよいのか。これまで筆者は、日本文学にとって満洲という場がいかなる意味をもったのか、日本の文学状況とのどのような相互交渉の中で個別の作家・作品・文学事象が生み出され、どのような独自性を呈するに至ったのかという問いを、日本語で論文を書くという制約の中で発することを選択してきた。

もちろん、日本語文学研究の中心に日本を位置付けて居直るつもりも、多様な民族や国籍に跨る日本語文学の担い手やそれを取り巻く環境を例外化するつもりもない。予め設定された枠組みの中で定められた研究対象の調査・分析に終始するのではなく、また、他分野の研究成果を摂取することで自身の研究領域を性急に相対化するのではなく、むしろ、安定した日本文学の形式の自明性と研究主体の自己同一性を日本文学研究の中で徹底的に問い直すこと。すなわち「自らの中に刻印されている境界を見つめ直すこと」（朴裕河「『境界』を跨いで〈東アジア〉作りへ」）。〈跨境〉とは、自閉でもなく超越でもない、〈いま・ここ〉に走る断層を可視化し、研究主体の変容を余儀なくするような営みでなければならないだろう。

東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校日本研究センター編『跨境／日本語文学研究』（創刊号 2014年6月20日 高麗大学校日本研究センター 296頁 2,000円＋税）